

環境 自然災害

避けられない災害でも人は付き合わなければならない

足もとを知ることが

災害対策の第一歩

竹内裕希子准教授が担当するテーマは、自然災害

です。「地震、津波、台風、高潮、土砂災害、洪水、火山。そのメカニズムについて知るだけでなく、どのような災害対策があるかを考えます」。肥後熊本学としては特に、火山なら阿蘇、土砂災害や洪水に関しては平成24年の九州北部豪雨災害を取り上げられます。「阿蘇だと火山噴火の災害を考えるかもしれませんが、それだけでなく、毎年のように発生する土砂災害を通して、火山がつくった地形や地質の特徴を見えます」。

自分たちの足もとを知ることが防災・減災の始まりだと竹内准教授。熊本大学の黒髪キャンパスも、実は白川が運んだ土砂が堆積してできた土地であり、昭和28年の6・26水害では、熊本大学でも学生が亡くなったという記録が残っているそうです。「今は白川の堤防を高くするなどの対策がなされていますが、それでも洪水と無縁とは言えません。自分たちがいる場所が川の堆積物でできたのか、山が崩れてできたのか、あるいは断層によって高低差があるのか、などを知ることが大切です」。そして災害への備え



熊本市がホームページで公開しているさまざまなハザードマップ

は、堤防や砂防ダムのようなハード対策だけではなく、ハザードマップを見る、気象台の情報を確認するなど、「自分で自分の身を守る対策が不可欠」と竹内准教授は話します。

客観的に災害を振り返り次に備えるきっかけに

自分で自分を守る自助、そして共助と公助も授業の最後に取り上げられます。「行政による堤防などのハード対策は、目に見えるため、安心感をもたらします。しかし、その備えが万全でないことが、阪神淡路大震災で明確になり、自助・共助の必要性が重視されるようになりました」。自助、そしてお互いが助け合う共助は、東日本大震災でさらにクローズアップされています。授業では、災害が起きた時だけではなく、日頃から地域の掃除に参加するなどの行動も共助の一部であることなどを考えます。

この授業は平成28年の熊本地震についても、「自分はどういう被害にあったのか客観的に見直す機会」になります。振り返ることは学問では不可欠であり、それによって次の災害に備えるきっかけになると言えます。「肥後熊本学は地域性を学ぶものです。熊本出身以外の学生にとっては、自分の育った地域



大学院先端科学研究部
社会基盤計画分野
たけうち ゆきこ
竹内 裕希子 准教授

とほかの地域と比較をする視点をも身につけたり、自分が生まれ育ったところを見直すことにもつながります」。

「地域はずっと同じままではありません」と竹内准教授。「人の住み方や技術も変わり、対策も常に変動します。それまでの自分の情報だけにとらわれず、地域の変化にも気づき、災害対策も自分たちで更新できる、そんな柔軟性を養ってほしいと思います」。

学びを深めるおすすめの1冊

熊本の地域研究

山中進 鈴木康史編著(成文堂)

熊本の自然や文化など、地域の成り立ちなどを、実例を通して紹介する一冊。



地名は災害を警告する

遠藤宏之著(技術評論社)

地名に隠された自然や地域の成り立ちについて記述した本。「災害由来の名称は各地にあり、それを知ることが防災につながります」。

